様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２４７６

研究課題名（和文）現象学的教育学に基づく授業研究モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a lesson study model based on phenomenological pedagogy

研究代表者
宮原　順寛（MIYAHARA, Norihiro）

北海道教育大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：１０３２６４８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：　北海道の小学校及び中学校をフィールドワークとして訪問し、静止画による授業観察記録に対する分析を行い、現象学の知見を踏まえた校内研修のモデルを提示した。
　咄嗟で機敏な判断とも言われる「教育的タクト」を十全に発揮するためには、授業者の中に教育的な思慮深さを涵養していくことが重要である。その際、これまでは文字記録をもとにした分析や動画をもとにした分析が授業検討会の中心であった。本研究では、授業時の様子を撮影した写真をもとに台詞や状況や分析コメントの書き込みを行った静止画を提示しながら、学習者や授業者にとってそれはどのような学びの経験なのかに焦点を当てた現象学的な授業研究モデルを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現象学的教育学の系譜につながるマックス・ヴァン＝マーネンの理論をもとにしながら、学習者や授業者は授業の中でどのような経験をしているのかを語り合うことによって教育的思慮深さを教師に涵養し教育的タクトを発揮させようとすることを目的とした授業研究モデルを開発した。その際、共通認識を得るための静止画による授業場面の提示を効果的に行う方法を提示した。
　また、遠隔地間でのあるいは時間差での授業研究を構想実施し、広大な北海道において専門家が小中学校の授業研究を効果的に行うためのモデルを提示することができた。
　さらに、学校現場での授業研究に関する研究者の倫理に関わる問題群についての議論の端緒を開いた。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is to propose a lesson study model based on phenomenological pedagogy for in-school teacher training through an analysis of still-image classroom observation records.
　It is important to cultivate pedagogical thoughtfulness in teachers in order to exercise "pedagogical tact," also known as quick and agile judgment. Until now, analysis based on textual records and video have been the primary materials for class review sessions. In this study, we developed a lesson study model based on phenomenological pedagogy to examine what learners and teachers were experiencing by presenting still images with written dialogue, situations, and analytical comments based on several photographs taken during the class.

研究分野：教育学

キーワード：教育方法学　現象学的教育学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の科研での採択申請をした2019年頃は、エビデンスに基づく教育政策が提起され、教育実践の研究に量的研究の成果を取り入れることが強く要請される傾向があった。その要請に対して、量的研究と質的研究の対立を一つのプラットフォームのうえで検討しようとして編まれたのが、杉田浩崇・熊井将太編の『「エビデンスに基づく教育」の閾を探る――教育学における規範と事実をめぐって』（春風社、2019年）であり、本科研の研究代表者である宮原も、第６章として「現象学的教育学を基盤とした教師教育における確信形成への省察の契機」（168-201頁）を寄稿している。そこでは、両者を止揚する視点として、現象学的教育学に基づく教員の教育的思慮深さの涵養と教育的タクトの形成の重要性を指摘している。

現象学的教育学は、オランダのユトレヒト大学のマルティヌス・ヤン・ランゲフェルドによって創始され、ヘルムート・ダンナーなどによるそのドイツへの紹介の時期を挟んで、現在ではカナダのユトレヒト大学のマックス・ヴァン＝マーネンの論考へと発展してきている。「ある教育的瞬間に子どもは何を体験しているのか」という問い掛けを中心とした省察による思慮深さの涵養と、その思慮深さに方向づけられた教育的タクトの養成を特徴としている。

日本における授業研究については、例えば、吉本均編『現代授業研究大事典』（明治図書出版、1987年）や恒吉宏典･深澤広明編『授業研究重要用語300の基礎知識』（明治図書出版､1999年）、日本教育方法学会編『日本の授業研究』（上下巻、学文社、2009年）や『教育方法学研究ハンドブック』（学文社、2014年）などのように、体系的な整理が成されている。このうち、『授業研究重要用語300の基礎知識』には、白石陽一「現象学的アプローチ」（41頁）という項目が掲載されている。また、『教育方法学研究ハンドブック』では、田端健人「現象学的アプローチ」（78-81頁）という項目が掲載されている。

しかしながら、これらの授業研究の理論体系の記述は、未だ現象学的な方法によって授業研究を行う具体的なモデルの開発は伴っていない。この点に本研究の研究意義が存在する。

なお、2019年度の申請時にはまだ新型コロナウィルス感染症が世界的に流行する前のことであったため、授業研究モデルの開発については研究途上で直接対面して授業の参観と分析コメントを1日のうちに連続して行うということが不問の前提となっていた。しかし、2020年度になり学校内への部外者の立ち入りが厳しく制限される中で、録画による授業参観及び遠隔通信による授業検討、また、それらの視聴機会の調整のために授業実施日ではない検討会開催の日程調整を余儀なくされた。このことは、一方で、学校現場にＩＣＴ活用のための機器や設備が整うという教育政策とも相俟って、授業研究モデルの新たな選択肢を増やすことにもつながった。

２．研究の目的

量的エビデンスによって説明責任を果たすことが強く求められる現在の学校教育政策に対して、それとは異なる角度からの教育実践の研究方法論を提起する必要がある。そのための考究の手がかりを現象学的教育学に求め、研究動向を整理しつつ、可能性と内包する課題について検討し、授業研究のモデルを提起することを本研究の目的とした。このことを通して、本研究では、単なる研究技法の紹介ではなく、教育学以外の自然科学を含む学問諸領域に対して、主観と客観の二元論あるいは両者の対立構造のいずれに陥ることなく、間主観性の中で捉えられた教育実践の意味や子どもの発達の意味に関する研究の明証性を提示することを目指した。

３．研究の方法

主として文献研究とフィールドワーク研究の2つの調査を相互に関連づけながら行った。

文献研究に関しては、現象学や授業研究に関連する書籍を蒐集し分析した。その際、狭くこれらのテーマの範囲に収集対象を限るのではなくて、授業における子ども理解や研究方法論に関する知見を深めるために、ケア論や科学史科学哲学、教員養成学等の各領域にも対象を広げた。

フィールドワーク研究としては、北海道の札幌市、宗谷教育局管区の浜頓別町と中頓別町、日高教育局管区のえりも町と浦河町、長崎県の諫早市等での小学校及び中学校等での校内研修に

携わりながら、授業観察とその分析コメントの提供を中心に事例を収集しつつ、そのような授業研究モデルの提起に関わる現場による評価の声を蒐集した。

４．研究成果

上述した文献研究とフィールドワーク研究の成果を、別掲した論文発表、口頭発表、図書への寄稿として発表した。

特に以下では３つのやや異なる方向性をもつ研究成果について述べる。

一つは、授業研究の倫理的な側面からの提起である。日本教育方法学会の第57回大会（2021年）の課題研究Ⅲ「教育実践研究における研究倫理――教育方法学研究の臨床性」に登壇者として、「エピソードで語る教育臨床研究の倫理に関する問題群――授業研究と現職社会人院生指導の現場から」と題して発表した。この内容に大幅な加除修正を加えて一章にまとめ、日本教育方法学会編『教育方法51――教師の自立と教育方法』（図書文化社、2022年、宮原順寛担当者箇所：第2部第２章「授業研究者をとりまく教育臨床研究の倫理に関わる問題群」、108-122頁）に掲載された。ここでは、授業研究者の側のさまざまな特性や異動等のライフイベントを含めた学校現場との関わり方について論じた。特に、授業者に対する観察者の優越性に起因する非対称性を是正するために、一方的な点検・査定・評価・批判・助言といったこれまでの授業研究の参観者のスタイルを、立ち止まり・感動し・教室の事実に学ぶというスタイルへの変更することの重要性が浮かび上がってきた。また、固有の身体性を持った授業観察者による分析を検討するに際しては、聞こえ方や見え方などの特性にも配慮が必要であることを指摘した。

二つには、授業研究の時間と空間の前提の問い直しの側面からの提起である。中国四国教育学会の第74回大会における自由研究発表「ＩＣＴを活用した遠隔地間での現象学的教育学に基づく授業研究モデルの開発」を元に、中国四国教育学会編『教育研究紀要』（第68巻、2023年、CD-ROM版）に口頭発表時題名と同名の論文「ＩＣＴを活用した遠隔地間での現象学的教育学に基づく授業研究モデルの開発」を投稿し、掲載された。この一連の論考では、北海道の僻地や長崎県の学校との遠隔地での授業研究の実際を紹介しつつ、授業の参観と検討の関係性について、これまでの現地での同日開催という前提に囚われず、遠隔地間または非同期による録画視聴や検討会を後日設定にして遠隔会議で開催するモデル等について知見を整理した。

三つには、ケアの視点からの子ども理解の捉え直しの提起である。主として、湯浅恭正・福田敦志編の『子どもとつくる教育方法の展開』（ミネルヴァ書房、2021年）の第５章として掲載された拙稿「子どもと出会い直すケア」（69-84頁）において論じている。自分と同じように感じ行動する複製品としての他者理解ではなく、自分とは異なる感じ方や行動の仕方をする異他性を備えた他者として子どもを理解することが現象学的な意味を取り出すことにつながる。そのために、依存と自立、非対称性と互酬性、正義と公平性、ケアの代替不可能性などのケアの論点の多様性について理解することが求められる。それと共に、ケアをする者こそがケアをされなければならないという知見が学校教育に携わる者にとっても重視される必要があることを提起した。

これらの研究発表に際しては、北海道および長崎県での小学校や中学校等における校内研修で行った授業研究モデルの試行が基盤となっている。その際には、タブレット端末であるiPadを活用して授業の静止画写真記録を撮影し、参観者である研究代表者が間主観的に捉えた授業の中での授業者と学習者の経験をその場で写真の画面に手書き文字で書き込んで記録する方法を用いた。動画の使用は、臨場感を伴いつつ参観者の記憶を手繰り寄せることができるという利点がある一方で、情報量が多く、現象学的教育学で重視されるそこでの経験の意味についての焦点化や共有が難しいという難点を持っている。静止画をもとにした語りであれば、記録されていない情報の補足や過剰な情報の省略を含めた意味の共有を行うことができる。また、短時間しか編集時間に余裕がないときにも、静止画であれば提示する順序の組み変えが容易である。授業後の検討会において、授業者及び他の参観者に対してこれらの写真文字記録を提示しつつ現象学的な意味づけをすることによって、経験についての認識の擦り合わせを行った。このようにして、授業者や観察者の直観経験とその省察を共有することを通して、教育的タクトを涵養する教育的思慮深さの形成と教育実践の意味の明証性の提示のために使用することができるような現象学的教育学に基づく授業研究モデルに関する提言を各地の校内研修において行った。ただし、児童生徒の写真をもとにした分析資料という点に配慮して、作成した資料の公表については当該学校での授業検討会での閲覧に制限している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 宮原順寛	４．巻 68
２．論文標題 ＩＣＴを活用した遠隔地間での現象学的教育学に基づく授業研究モデルの開発	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育研究紀要（中国四国教育学会編）	６．最初と最後の頁 205-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 宮原順寛
２．発表標題 エビデンスと現象学的教育学
３．学会等名 日本教育方法学会第56回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宮原順寛
２．発表標題 フッサール現象学における問題の所在とその系譜
３．学会等名 中国四国教育学会第72回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宮原順寛
２．発表標題 エピソードで語る教育臨床研究の倫理に関する問題群――授業研究と現職社会人院生指導の現場から
３．学会等名 日本教育方法学会　第57回大会　課題研究Ⅲ「教育実践研究における研究倫理――教育方法学研究の臨床性」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮原順寛
２．発表標題 現象学的教育学に基づく授業研究モデルの開発
３．学会等名 日本教育方法学会　第58回大会　自由研究発表
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮原順寛
２．発表標題 ＩＣＴを活用した遠隔地間での現象学的教育学に基づく授業研究モデルの開発
３．学会等名 中国四国教育学会　第74回大会　自由研究発表
４．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

１．著者名 日本教育方法学会	４．発行年 2022年
２．出版社 図書文化社	５．総ページ数 184
３．書名 教師の自律性と教育方法	

１．著者名 湯浅恭正・福田敦志編	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 235
３．書名 『子どもとつくる教育方法の展開』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

書評執筆 宮原順寛、「〈書評〉　加藤誠之著『思春期問題としての不登校――自我体験に関する現象学的解明を手がかりとして』」、日本教育方法学会紀要、『教育方法学研究』、第46巻、2021年3月、99-100頁所収。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関